因島高校を支援する会

発行
因島高校を支援する会
会長　竹中啓修
事務局：因島高校ＰＴＡ
108452-4-1281
題字　竹中啓修

新年のご挨拶

因島高校を支援する会　会長　竹中　啓修

因島高校を支援する会
会長
竹中啓修

新年明けましておめでとうございます。

今年は、平成十二年十一月に本会が設立して、三年目の年にあたります。

そこで今年も次の点に力をいれて活動してまいりたいと思っております。

第一点目は、生徒の進路保障の確立であります。島外の高校へ、進学しなくても因島高校で同等かそれを凌ぐ、教育・指導が受けられるようにしなくてはなりません。頑張れば希望した進路へ進める。この当たり前の事が実現できる様に力を注いでまいります。

具体的には、学力向上のための「早朝放課後補習・春夏の学習合宿・代々木ゼミサテライン・海外語学研修」などの実施であります。

次に、学校の情報公開です。地域から信頼される学校になるためには、地域の皆様のお知恵やご協力を頂く必要があります。学校の状況を伝えないままに、力を貸してくださいとは言えません。因島高校の良い所も悪い所も全て見て頂いたうえで、皆様のお知恵やお力をお借りしようと思っております。

最後に、「学校の常識」の払拭であります。確かに、一般の営利目的の会社とは違う点も多々あります。しかし、基本的な部分において、一般社会常識と乖離した判断基準や価値観があっては、地域から信頼されないでしょう。その点も全力をあげて改善してまいりたいと思っております。

今年も、役員一同頑張ってまいりますので、ご支援ご協力よろしくお願いいたします。

校訓「自重互敬」のもとに

校長　桶東　愛生

校長
桶東愛生

平成十一年四月、旧因島高校と旧因島北高校が統合されて、それぞれ、「新因島高校」の土生校舎、重井校舎として出発しました。

当時は、全日制課程の土生校舎、重井校舎そして定時制課程という三つの学校があると同様な状況でありました。

私が、平成十一年に、本校へ着任して以来既に四年目を進行中であります。

土生校舎、重井校舎が統合されるまでの三年間は、午前が土生校舎、午後は重井校舎というように、土生と重井の両校舎を、毎日半日づつ勤務することが日課でありました。

したがって、必要最低限の書類は、土生校舎、重井校舎と自宅の間を持ち歩く習慣が身につき、未だに二つのカバンに蓋ができないくらい沢山の書類を詰めて持ち歩いております。

それぞれの学校は、昭和四十一年に旧因島高校重井分校と機械科を合わせて、因島北高校が分離独立する以前は、いずれも「元因島高校」でありました。

したがって、今回の学校統合は昭和四十一年以前の「元因島高校」へ発展的に回帰したとも言えます。

本校の校門を入ると左手に、新因島高校の校訓である「自重互敬」という石碑を設置しております。

「自重互敬」という言葉は、戦後直後の幣原内閣の文部大臣を務められた安部能成先生から、昭和三十年代の「元因島高校」時代に、本校へ贈っていただいた墨跡の言葉を借用したものであります。

安部能成先生は、夏目漱石の門人として知られた哲学者・教育者であり、文部大臣として、「六・三制」など戦後の教育制度改革を進められた方であります。

現在、安部先生の「自重互敬」という墨跡を有する学校は、岡山操山高校、尾道商業高校など、山陽筋にあり、先生の郷里が愛媛県松山市であることから、岡山、尾道、松山を点線で繋げば、因島は、尾道、松山ルートの一角となります。

そういう地理的な縁か、又は、人的な縁があって頂いたのではないかと思います。

戦後の教育改革を担当された安部能成先生の言葉を、半世紀後の現在の教育改革の時期にあたって、本校の校訓にするというのも、奇しき因縁ではないかと思っております。

本校は、旧因島高校、旧因島北高校の良き伝統を受け継ぎながら、「自重互敬」の校訓のもとに、支援する会の皆様のぎ理解とご協力をいただきながら、新しい「因島高校」の校風を樹立してまいります。

支援する会のホームページ開設

http://08452.no-ip.com/shien/

因島市民の高校になろう

PTA会長　村井　圭一

PTA会長
村井圭一

市民の中には、青年期に勉強の機会が無かった人、現在、ホームヘルパーの資格をとりたいとか、英会話を習いたいとかいう人もいると思う。高校を開放し子どもたちに混じって勉強したらどうでしょうか。

授業を本気で受けない生徒が多いと先生が嘆いているが、本当に勉強したい大人が受講すれば、先生もやりがいが増すであろう。遊びたい生徒たちも自分の親のような人、祖父母のような年代の人が、「子どものころ、勉強できなかったから、もう一度勉強するんだ。」という姿を目の当たりに見れば、彼らの学習態度にプラスになると思う。

生徒が注意を聞かないと嘆く先生が多いが、一緒に学ぶ自分の親や近所のおじさんのような人から注意されれば、素直に聞くのではなかろうか。昔は、地域が子を育てる、とよく言われた。

また、因島高校は、最新の設備も整っています。これを高校生だけの宝にするのでなく、保護者、市民も広く活用し、「自分たちの学校なのだ。」と認識すれば、もっと高校に対する市民の愛情が高まり、在校生もまわりから注目されていることを感じる。そうしながら、高校が、因島の文化のとりで、文化の発信基地になってゆく。

因島の子どもたちに、将来働く場をもうけてやれるよう、行政や民間が努力していますが、「将来、帰郷して、島のためにがんばろう。」という気持ちを持った子どもに育てるのが、われわれ保護者や教育関係者のつとめだと思います。学習意欲の高い子どもが、島外に流出していますが、「因島高校に進学した子どもの方が、郷土に対する愛着が高い。」という教育を望みたいものです。それも、因島高校に進学させようという一つの要因に成るでしょう。

そういうことに力を入れている高校もあります。愛媛県大島高校では、地元の大島石を使った工芸の授業、瀬戸田高校では、海洋を使ったスキューバーダイビングの授業、山口県大島高校では、地元の三ヶ所の福祉施設を考慮して福祉科新設等々。

因島高校は、平成十四年度、市内中学卒業生の五二％しか、入学しませんでした。今春島外に進学しようとする生徒をどれだけ引き留めるかが課題ですが、学力向上、進路の保障も大事な要素ですが、違った観点から考えてみました。

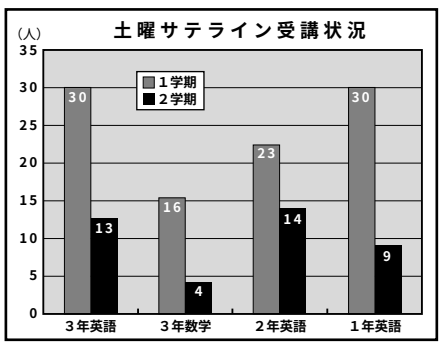
衛星放送サテライン講座
― 頭の痛い受講者減少 ―

サテラインは、東京の代々木ゼミナールの国公立大学入試を対象にした授業を衛星放送で、受講できるというもので、ＰＴＡが、学校と協力して進めています。

今年度より「土曜サテライン」が始まり、運営費として同窓会とＰＴＡの協力で基金が設立されました。

サテラインの受講者を次第に増やす計画でしたが、二学期になって激減し、対応に、学校、ＰＴＡは苦慮しています。

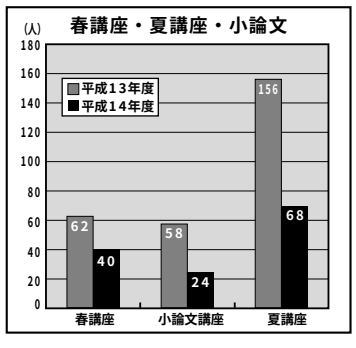
減少した理由としては、「ただ見ているだけで、おもしろくない。」「わからない。」「土曜日がクラブ活動と重なるため、受講できない。」



先生方や受講生の保護者からは、「続けてほしい」との要望がありますが、現状のまま推移すれば基金が二年で底をつくという見込み。将来も受講者の大幅な増加が見込めないなら、計画の変更、縮小もやむをえない。三学期は二年生だけ実施の予定。

現在契約しているコースを、本校生徒の実情にあわせてランクを選定しなおせば、受講者は今より増えることも見込まれる。

今後は、生徒数を増やす努力、平日での実施など、土曜を廃止して、昨年のように春休み、夏休みだけの短期間集中講座にするかも含めて検討中である。



しかし、春講座、夏講座等のサテラインも、昨年と比較すると半分以下に減少しており、大幅な赤字も見込まれ今後の対策が急務であり、先生方は頭を痛めています。

天体観測　学校開放講座　陶芸

学校公開講座として、ＰＴＡは、最新鋭望遠鏡を使って、十月十日、十一日と、「お月見会」と称して月の観測を行いました。

高倍率で、月のクレーターもはっきり見え、保護者に連れられた小学生など、熱心に観察しました。指導員の村上元信さん（因島高校ＯＢ、元ＰＴＡ役員）は、「冬空は、もっとくっきり星も見えるので、寒さに負けず、次回も参加してほしい。」と話していました。

十月二十六日、ＰＴＡは、学校開放講座の第二弾として、陶芸教室を開催しました。因島高校では、校内に電気炉を据え、生徒が陶芸を学んでいますが、保護者や市民も陶芸を学ぶことによって、因島高校に親しみを持っていただきたいということで実施しました。

▲天体教室

講師には高校で生徒に陶芸を教えている三庄町の伊賀崇先生にお願いし、受講生は熱心に、「芸術の秋」を堪能していました。

村井圭一ＰＴＡ会長は、「学校に市民のみなさんが、集まることによって、学校に関心を持っていただき、因島市民みんなの高校だ。という意識をもって、見つめてほしい。」と、話していました。

冬の天体観測会

1月24日(金)
PM7:30～9:00

市内小中学校を見て歩き

因北小

○生活習慣改善
○習熟度別授業で学力向上

因北小学校（岡野良子校長、三三六人）では、児童の基本的な生活習慣を身に付けさせることと、確かな学力をつけることに取り組んでいる。基本的な生活習慣をつけるため、十月から「生活ふりかえりカード」をはじめた。毎月最初の一週間、「朝ご飯を食べた」「おはようと挨拶した」「夜一〇時に寝た」など、五項目について、児童それぞれに○×で記入させ、家の人と先生のサインをいただく。

「朝ご飯を食べない」児童が全体の一五％あり、保護者に働きかけながら、二ケ月間、表をつけることによって、ゼロになった。保護者の関心も高まってきたことが伺え、校長先生や、担当の先生方も、努力の結果を喜んでいる。

「一〇時に寝る」は、子どもが大人の生活に同調し、寝たくない子が多くて、困っていたが、次第に成果が現れつつあるようです。これらは、児童の生活習慣の改善であるとともに、親が子どもに対していかにあるべきか、反省させられます。

第二に「学力をつけること」ですが、因北小学校では、三、四、五年の算数の授業で、チームティーチングといって、先生が各クラス二人つき、習熟度別授業を実施しています。

少人数学級が注目されておりますが、千葉県の教育委員会が行った研究について、千葉大学の明石要一教授が、次のような報告をしています。

単なる少人数クラスは、必ずしも良い結果をもたらすとは限らない。例えば、四〇人のクラスを、二〇人と二〇人の二クラスに分けても算数の平均点はわずかしか上がらない。伸びた子どもは成績が中ぐらいの子ども達であり、上位と下位の子ども達は変化を示さない。ところが、発展コース、標準コース、じっくりコースの三つに分け、子ども達にコースを選んでもらう。これだとどのコースの子どもも成績が伸び、結果としてクラスの平均点がかなりあがる。なぜか。習熟度別授業だと、教師は子どもにあった指導方法を工夫する。機械的に分けて少人数にした場合、教師の指導方法は従来のままで、成績の中位の子ども達にあった指導方法である。学力をつけるのに習熟度別は有効のようだ。

因北小学校でも、十月から習熟度別授業を取り入れていますが、子どもが授業を理解でき、喜んでおり、先生方も指導法を工夫しながら進めています。

田熊小

○30人31脚全国大会に出場

田熊小学校（岩木久満校長、一九七人）では、十一月二十三日「30人31脚全国大会」に広島県代表で出場した。

二学期運動会が済んだころ、六年担当の渡辺良平先生が、「挑戦してみるか」と、提案したところ、子どもたちも乗り気で、「卒業前の思いで作りと仲間との絆をさらに深める。」ことを目標にして出場することになった。県大会では、強豪校がひしめいている。さっそく田熊小でも毎日早朝放課後の練習が始まった。

十月二十六日。選手は三十人でいいが、六年生四十四人のうち走れるものは、みんな走ろうということで、三十八人が走った。

距離は50メートル。予選は、10秒26のトップで通過。練習のときより2秒早い。四校決勝に進出。見事自己ベストの10秒14で優勝。

学校の陸上記録会で、50メートル、11秒台の子もいる。しかし、その子も大会では、10秒14でみんなと一緒に走った。「なぜか。」「みんなの心を一つにして支えあい励ましあうことで、よりすばらしい力を発揮することができた。」この経験と自信は、他の面にも、大きくプラスに作用していくと思われる。

十一月二十三日横浜の全国大会めざして朝に夕に練習。先生の掛け声、児童の声が校庭にこだましていた。保護者も毎日学校に集まって準備。地域でも大看板が作られ、因島市あげての激励と応援があった。

▲田熊小での練習

児童四十四人分の旅費はテレビ局の負担だが、応援団の保護者や家族の分は、個人負担。にもかかわらず、六十八名の応援団が集まり、引率を含めて総勢一一五人の大田熊チームがヨコハママリーナを目指した。全国大会では鎧姿と水軍旗、しゃもじをもって力の限り応援した。結果は29チーム中16位、タイムは自己ベストの9秒88、広島県新記録の大健闘であった。翌日は「二回目の修学旅行だ。」と喜んでディズニーランドを見学した。

ふるさと因島勉強会開催

十月十八日、PTAでは、市役所から企画財政課宮地真良主幹はじめ三名の講師を招き、「因島の現状と将来」というテーマで勉強会を行い、PTA会員や、因島在住の教員が参加しました。

私たちの子どもたちが因島の将来を担っていくわけですが、PTAとして、子どもたちに誇れる因島を残してやることが、郷土を愛する心や豊かな心をはぐくむことにつながると思い、自分たちの住んでいる因島をもっと知り、勉強してみようということになりました。

市政に対する要望や瀬戸田町との合併問題、高校生の通学路の安全対策など話し合いました。

高校生の生活指導強化

因島高校では、先生方とPTAが中心となって、生徒の生活指導の向上に取り組んでいます。

毎月二回、校門での服装、頭髪、遅刻等のチェックを行っていますが、より規律正しい高校をめざして厳しく指導することになりました。

▲因島高校授業

遅刻については、約一二〇人だったのが、厳重注意の指導により三分の一に減少しました。

アルバイトについては、届け出制になっていますが、無届でしたり、試験中のバイトも禁止を守らない生徒もいる。学校側で実態把握が不十分な面もあったが、今後厳しく対処することになりました。市民のみなさん、高校生バイトを雇用している事業主の皆さんのご協力をお願いします。

校内で**タバコ**を吸う生徒もかなりいるため、学校は、特に多い三階、四階のトイレ四ヶ所をベニヤで封鎖し、取締りを強化した。タバコについては、学校での指導には限界があり、家庭内での指導、躾が重要であり、保護者のご協力をお願いします。

市民の投書箱

◆高校の玄関脇に生徒用の靴箱がありますが、靴の盗難が頻繁に起こります。意地悪でとられるもの、高価な靴を取られるもの、いろいろあるようですが、生徒がとってるのか、外から誰かが来てとってるのか、わかりませんが、見えにくいところにあります。かぎをかけるとか、監視カメラをつけるとか、なんとかなりませんか。

自転車をとられたという人もいます。

とられたら、「みんなが、ほしがるような、ええのをもってくるんが、いけんのじゃ。」と、言われるんです。おかしいと思います。なんとかしてください。

◆◇◆◇◆◇◆◇

◆高校で、授業中騒いでいるのに叱らない先生がいる。生徒が先生に「静かにさせてください。」と言うと「騒ぐ生徒も授業を受ける権利がある。」と言う。授業の内容は、騒ぐ生徒に合わせて、低レベル。受験に対応できない。

中学でも、教師への暴力、暴言、校則を破った生徒を叱らない先生がいます。生徒を叱ることは、生徒の人権を傷つけてしまうという見せ掛けの人権への配慮から生徒を叱らず、話をするだけ。私達から見ると、指導を怠る教師に見えます。

犠牲になるのは、勉強をしようと思っている大多数のまじめな生徒達ではないだろうか。

サテライン講座を受講して

三年　川野　綾

私がサテライン講座の小論文を受講しようと思ったのは、自分の志望校の入試科目に小論文があったからです。受講するまでは、小論文がどんなものかわからない状態でした。しかし、実際に受講してみると小論文がどんなもので、どんな書き方をすればよいのかがわかりました。小論文講座には、添削問題があり、自分で理解してないことや直さないといけない所もすぐにわかりました。先生がとてもおもしろく、先生の話がどんどん頭の中に入っていき、月一回のサテラインが楽しみになりました。すべて受講し終えるころには、自信を持って小論文が書けるようになりました。いろいろな傾向の問題が、テキストの中に入っていて、どんな進路の人にも対応できるようになっています。

私もサテラインのおかげで、見事第一志望の大学に合格できました。サテライン小論文講座は絶対に受講すべきです。みなさん、進路実現に向けて頑張ってください。

高校野球応援体制固まる

因島高校では、昨夏、PTAと野球部保護者会が中心となって応援に行きましたが、その後、学校に応援体制の確立を申し入れていましたが、このたび、来年度からの「学校上げての応援体制」が組まれることに決まりました。

一・生徒指導部生徒会係、野球部顧問をもって、応援体制の企画立案運営をおこなう。

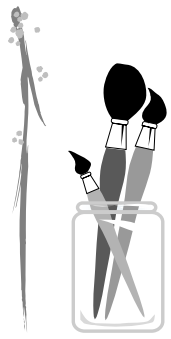
二・応援団リーダーは、六月上旬に生徒会、野球部部員で構成し、一般応援団部員を募集し、応援練習を行う。

三・応援団リーダー、吹奏楽部員は、授業日でも公欠扱い。

村井圭一PTA会長は、「野球部と応援団、吹奏楽部の一体となった応援で、愛校心も芽生えてくるだろう。」と喜んでいます。藤原邦雄野球部保護者会長は、「野球部の選手も、頑張ります。」と、感謝していました。

今年の高校野球は、盛り上がりそうです。市民のみなさんも、いっしょに応援にでかけませんか。

編集後記



広島県が十月に実施した県民意識調査によると、義務教育への満足度について、次のような結果が出ている。

小学校の現状に満足しているか。（満足二六％）（不満四六％）中学校では、（満足一八％）（不満五五％）これは、ゆゆしき状況である。不満な点の大きなものとしては、一・教職員の指導力。二・こどもとの信頼関係。三・いじめ、問題行動、不登校などへの指導。四・豊かな心を育てる教育。

かなり、厳しい評価だ。開かれた学校をめざしているが、学校へ注文するばかりでなく、われわれも課題を共有して、解決に向けて進むことが必要ではないだろうか。

はたして高校への満足調査をおこなったら、どんな結果が出るだろうか。生徒にきいてもおもしろい。現状を見て問題点を把握することが、解決の第一歩だと思う。